

第 1 回次期栃木県教育振興基本計画懇談会の結果について

- 1 日 時 令和元(2019)年12月19日(木) 14時～16時
- 2 場 所 県庁本館 6 階大会議室 1
- 3 出席者
 - ・次期栃木県教育振興基本計画懇談会委員
 - ・教育委員会事務局：教育長、教育次長(管理)(指導)、各課室長等
- 4 内 容
 - ・議事に先立って、委員長及び副委員長の選出が行われ、次のとおり互選された。
 - 委員長 伊東明彦氏(宇都宮大学教育学部教授)
 - 副委員長 河合美由紀氏(栃木県PTA連合会理事)
 - 佐久間昌平氏(宇都宮機器(株)顧問)
 - ・議事
 - (1) 次期栃木県教育振興基本計画の策定について
事務局から策定の趣旨、スケジュール、策定体制等について説明。
 - (2) 現行計画(栃木県教育振興基本計画2020-教育ビジョンとちぎ-)の検証について
事務局から現行計画と現行計画の検証結果について説明。
 - (3) 第3期教育振興基本計画(平成30年6月15日閣議決定)の概要について
事務局から、特に社会状況の変化、教育をめぐる状況変化について説明。
 - (4) 意見交換
「おおむね10年後(2030年頃)までに予想される社会の変化等を見据え、令和3(2021)年度からの5年間で本県の教育が目指すべき方向性や重視すべきこと」について各委員から意見をいただいた。主な意見は別紙のとおり。
- 5 今後の予定
第2回は3月6日(金)、第3～5回は令和2(2020)年度に開催する予定。

第1回次期栃木県教育振興基本計画懇談会（R01.12.19）における主な意見

テーマ：「おおむね10年後（2030年頃）までに予想される社会の変化等を見据え、令和3（2021）年度からの5年間で本県の教育が目指すべき方向性や重視すべきこと」について

計画策定の基本的な考え方について

- ・現行計画をもとに、変えてはならないものを大切にしつつ、新たなものを入れていくといった整理が必要なのではないかと。
- ・変化の激しい時代であるからこそ、教育基本法に謳われている「人格の完成」という教育の本質に立ち戻り、失ってはならないものの視点も計画には残していただきたい。
- ・現行計画には15の基本施策がある。単純に数を増やすことは避けてほしい。全方位に対応しようとすると膨大になり、学校も施策の一つ一つを意識した活動は困難。精選し、焦点化した施策が必要。

子どもたちに育てるべき資質・能力、求められる教育について

Society5.0の到来に向けて

- ・パソコンやスマホはあるのが当たり前だということを前提にこれからの教育を考えなくてはいけない。
- ・情報を整理し、自分が必要としている情報を選ぶ力の育成が必要。
- ・複数の情報を批判的に整理しながら自分の考えを作り出すような力を育てる必要がある。
- ・パソコンが1人1台になれば、ネットで調べればすぐ出てくるような知識を教えるような授業ばかりでは子どもの検索能力には勝てない。ICTを使うことで直接対話が生まれる、自然観察が深まるなど、リアルな学習をデジタルの力で深める使い方を推奨すべき。授業を変える動きを速める必要がある。
- ・ICTの普及・進化には危険が伴う。そうした危険に対応するための教育が必要。

個に応じた学び

- ・「個別適正化された学び」はSociety5.0時代の教育のキーワード。ICT活用以外でも個の特性に応じた教育が必要。特別に支援が必要な子どもに限定せず、全ての子どもの力を伸ばす教育を目指すべき。

たくましさの育成、体験の機会の充実

- ・今後、環境変化の中で自然災害は増えていくだろう。緊急事態において人としてとるべき行動、生命、財産を守るための対応力などを、学校、地域、家庭の中で学んでいける機会があってもよい。
- ・直接会って話すコミュニケーション能力の育成や、電気がなくても生き抜く力、ライフハックのようなものを身に付けることも必要だと思う。
- ・生活の中で冒険的な体験や文化的な体験をする機会が不足しており、子どもたちが小さくまとまってしまっているのではないかと。その結果、学校で困ったことがあったりつまづいてしまったりすると学校に行けなくなってしまうなど、不登校の原因の一つにもなっているのではないかと。
- ・ゲームなどで室内にいて、外に出ることが少ないと体力も落ちる。目や脳も疲れて、何かをしようという意欲も欠けてしまう。夜更かしをして朝起きられない、学校に行くのが面倒になるといった子どもも増えるのではないかと。
- ・小学校までの実体験の不足が優先順位をつけて取り組む力や想像力の欠如などの要因になっているのではないかと。
- ・大学で野外教育を必修としており、学生の成長を実感している。本県でも豊かな自然を生かして野外教育を行うとよいのではないかと。
- ・子どもたちは少しヒヤリハットがないと危険を実感することができない。そういった体験型の学習というものも必要。

自主性・主体性の育成

- ・子どもたちには「なぜ勉強するのか」ということを考えさせてほしい。そこに「働く」ということは切っても切れない。自分がやりたい仕事に出会うことなどほとんどない。それでも自分で考え、行動してみることが大切であることなどを小さいうちから教えてほしい。

- ・子どもに大人の意見を押し付けるのではなく、子どもが自主性をもって、自分の将来を自分で責任をもって自分で歩いていく。保護者、教師のせいにしない子どもに育てほしい。

幼児期の教育の大切さ

- ・小・中・高の様々な課題、問題の根本にあるのは、幼児期の過ごし方にあるのではないかと思う。次期計画には、できれば0歳から、少なくとも3歳からの幼児教育の部分の教育の質の向上という辺りを目指した内容が盛り込まれることを期待したい。

市民的資質の育成

- ・学校でもずいぶん前から環境教育を行ってきており、子どもたちも知識としてもってはいるが、実感をもって理解し、自分たちが具体的に何をすればよいのかまでは考えられていないように思う。
- ・主権者教育（選挙に関する基本的な知識や投票への意欲向上など）が必要。

教員・学校について

- ・子どもたちの高度な学習や将来に関われるというのが教師の大きな魅力。働き方改革とバランスをとりながら、新たな教育を創る教師をどう育てるべきなのかというところを考えていく必要がある。
- ・教師の資質（授業力）向上はいつの時代も必要。それ以上に教師の魅力を高める施策が必要。例えば、茨城県は、県教育委員会が大学だけでなく高等学校に出向き教師の魅力を伝えている。模擬授業をするなど様々な工夫をしているとのこと。
- ・精神的にも肉体的にもゆとりという部分がないと子どもたちにより教育はできない。現場を支えている教師一人一人の環境という部分も一つの視点として捉えていただけると有り難い。
- ・学校の先生は忙しすぎる。アウトソーシングできる部分はした方がよい。
- ・担任によって子どもの1年間が大きく違うという話をよく聞く。担任制をやめ、複数の教師が見るようにすればよいと思う。
- ・課題の多くはコミュニティースクールでカバーすることができる。様々な体験活動など特色ある教育が生まれ、子どもたちには問題解決能力やコミュニケーション能力が育まれる。教師の負担も軽くなる。是非、コミュニティースクールを通して、子ども達に問題解決能力、何かを生み出す力、コミュニケーション能力などを育てていただけたらと思う。

家庭・地域について

- ・お昼になっても家に帰らないで遊んでいる子がいる。家に帰っても親がいない、昼食も食べないと言う。家庭の教育環境の格差の部分も含めて教育を考えていかなければいけない。
- ・地域として子どもたちの成長にどのように関わられるかということをもう少し考えていかなければいけないと思う。
- ・最近の保護者は甘い。雨が降ると子どもを送る保護者が多い。保護者の教育も必要。
- ・保護者だけでは子どもは育てられない。地域の様々な人たちが手を取り合って、皆さんの力で子どもをサポートしていただければと思う。

新たに取り入れるべき視点について

- ・総人口、就学人口が減っていく中で、今後、社会を持続可能な形で維持、発展させていくためにはどのような地域づくり、学校づくりを目指すのかという視点も重要な課題になってくる。
- ・栃木に帰ってきたい、是非、地元で就職したいと思えるような施策に力を入れていくのも大きな一つではないか。
- ・SDGs 2030年に向けての目標もある。持続可能性の視点が重要になってくる。
- ・スポーツ指導者に対するスポーツインテグリティや生徒の自主性を尊重した指導法等の研修も必要。
- ・国体・障害者スポーツ大会に向けて整備する施設を広く県民に使ってもらえる仕組みづくりなど持続可能な施設運用の在り方について検討が必要。